



釧路

異形の建築、記憶の建築

巖谷 國士 Iwaya Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全5巻。昨年初夏にはまた道東の旅をした。

ひとつの都市の景観がひとりの建築家によって左右される、ということはめずらしい。バルセロナのアントニ・ガウディなどがその例で、サグラダ・ファミリア聖堂やグエル公園をはじめ、この特異な建築家の作品群の存在しないバルセロナを想像することは困難なほどだが、さて、日本にそんな都市があるとすればどこだろうか。

それは釧路かもしれない。そう思いついたのは先日、30数年ぶりにこの都市を訪れ、中心部の幣舞橋を渡ったときのことだった。といっても橋そのものではなく、橋から見る釧路川北岸の光景——以前に来た1970年代にはなかった眺望——がそう思わせたのである。

そこにあったのは巨大な船のような劇場のような工場のような、いわくいいがたい形状と色彩をしたビルだった。大小さまざまな四角や三角や台形や、ジグザグや格子などの幾何学図形を組みあわせ、淡い青と白とサーモンピンクに塗りわけた幅広い5階ほどの建造物が、雨天に波立つ川面の上によこたわっている。

日本とは思えない形と色だが、奇をてらった現代建築という感じはしない。西欧の運河都市にでもありそうな建物で、だが、それでいて釧路らしい個性も感じさせる。道東の大湿原と太平洋に挟まれた土地の自然と歴史を背景に構想され、都市の人格を体現しているとも思える大胆な作品だ。橋を渡って南岸から真向いに見ると、そんな印象がいっそうつまった。

設計者は釧路の生んだ特異な建築家、毛綱毅曠(1941-2001)。私はほぼ同世代のこのアーキテクトに以前から関心があって、じつは先日の釧路訪問も、彼の作品のいくつかを見るのが主な目的だった。毛綱毅曠は59歳の若さで亡くなるまでに、故郷の町に十数箇所の建物を残しているのだが、どれもこれもじつにユニークな作品である。

川岸に立つこの「釧路フィッシャーメンズワーフ MOO (Marine Our Oasis ≡ 海に生きる町のオアシス)」も代表作のひとつで、サンフランシスコなどのフィッシャーメンズワーフ(漁人の波止場)にならい、市場や飲食店や物産店をふくむ大規模な商業・観光施設だが、1989年に完成して以来、橋からの眺めを大きく変えてしまっている。

そればかりではない。MOOの東側にはEGG (Ever Green Garden ≡ 常緑庭園、同年) というガラスの卵み



幣舞橋から見た「釧路フィッシャーメンズワーフ MOO」。毛綱毅曠の代表作のひとつで、外壁は薄い青、白、サーモンピンクの3色。市場や物産店、飲食店などの入った公共施設で、右にガラス屋根の大温室EGG(常緑庭園)が隣接する。なお、橋に立つ彫像は舟越保武作。4人の著名彫刻家による四季の乙女像のうち「春」である。撮影：筆者

たいな大温室が隣接しているし、南岸の東には「宇宙船」めいたセンチュリーキャッスルホテル（1987年）もある。高みにそびえる生涯学習センター（まなぼつと幣舞、1992年）なども、毛綱の影響を感じさせる。似かよったトーンの異形の建築が共鳴して、町の中心部の風景を独特のものにしている。

歌にも唄われた幣舞橋は北海道を代表する名橋で、欄干に立つ四季の乙女像とともに親しまれてきたが、4人の著名彫刻家による裸体ないしほぼ裸体の乙女像がなぜか従来の日本の都市彫刻のパターンであるのに対して、背景にひろがる毛綱建築は日本を感じさせない。いずことも知れない「くに」の、だが道東という別の風土・気候・歴史をもった地域の、首都とってよさそうな風格が生まれている。

もちろん内部も見て歩いた。EGGの緑ゆたかな温室を抜けてMOOに入ると、大空間のなかに酒場や食堂や物産店や休憩所がそれぞれコーナーをつくって、ときに迷路を思わせる。スロープ状の通路があり、昇り降りするうちに気がつくと別の階にいる。空間が巨大な貝殻のように螺旋状になっている気配もある。なにやら縮小された宇宙、あるいは母胎のなかにいるという感覚が芽ばえてくる。

南側の開口部を出て鉄骨のあいだの階段を降りてゆく。波立つ釧路川の水面が眼下にひろがり、対岸に横づけになった白い船や、幣舞橋の橋桁や橋杭やアーチや、欄干や街灯や乙女像たちが、薄霧をすかして見わたせる。ああ釧路にいたのだ、と感じる。

市場で働く中年の女性に話しかけてみた。

「MOO、すごい建物ですね。地元の人にとってはどうなのでしょう？」

「はじめは反対とかあったけど、そのうちに慣れちゃったね。へんな建物だけど、ほかの町と違うものがあってもいいんじゃないの？」

彼女は建築家を「毛綱さん」と呼んでいた。大学は神戸だったし、東京で活動していたアーキテクトだが、釧路にいればかならず目に入る異形の建築とともに、毛綱毅曠の名は、ガウディほどではないにしても、すでに親しい隣人として記憶されているらしかった。

釧路市立幣舞中学校の正面。合併・改名前の市立東中学校は毛綱毅曠の母校だった。奇想天外とも見える設計のゆえに論争がおこり、一部の変更を余儀なくされた。ここに紹介した毛綱建築はどれも当初、似たような経緯をたどっている。撮影：筆者

規格外の中学校校舎

毛綱建築は市内のあちこちにあるが、ここではとくにあと2箇所をクローズアップしよう。どちらも大規模な公共建築で、市の東南の春採湖^{はるとりこ}に面した丘の上に立ち、敷地もほぼ隣りあっている。市立幣舞中学校（もとは毛綱毅曠の母校だった東中学校、1986年）と、市立博物館（1983年）とである。

幣舞中学校の校舎前にはじめて通りかかったとして、そこが学校だと思える人は少ないだろう。幅広い堂々とした正面は左右対称で、外壁はグレー一色、両翼の壁には窓がなく、あえていえば神殿か博物館か、倉庫か工場のような印象をうける。あるいはいっそ、巨大な怪物みたいだといってよいかもしれない。

実際、中央上部だけにならんで6つの窓は目のようだし、その下には口がぽっかり開いている。正面階段を昇って近づくあいだ、怪物の口に吸いこまれてゆく感じがなくてもない。

平日の授業中で人影がなく、あたりは静まりかえっていたので、思わずその口に入って内部を覗いた。ここは職員・来客用の玄関らしく、右へ行くと吹きぬけのホールを見わたせる。円柱と欄干と、円形劇場式の階段席は入りくんで構成された大空間で、どことなく異国の神殿のように、幻想的・神秘的な雰囲気漂わせている。

ここでも母胎のなかにいる気分になり、しばらく立ったままでいると、どこからか中年の立派な女性があらわれ、部外者は立入禁止ですといわれた。事情を説明できずに即刻退去となったのは残念である。

そんなわけで見られたのは校舎の外側だけだったが、それでも建物の雄大さと不思議さ、デザインの大胆さと周到さ、思想性と教育性、それに稚気と遊び心を知るには足りたように思う。



向って左から見てゆくと、大きな箱形の教室棟がぎつぎに張りだして、奥の体育館へとつづく。その角を右折してさらに裏手にまわったところに、複雑な形の中庭がひろがる。

上空に7本の巨大な半円アーチが渡され、徐々にずれながらリズムカルに並んでいる。その先に大ドーム。宇宙的・未来的というべきダイナミックな空間構成だ。ドームの下の方が通学用の玄関らしい。生徒たちは中庭の複雑な空間を通過してから、ようやく建物の胎内に入るのである。

そこから正面の右に出ると、各階が雛壇式にせりあがっている特別教室棟で、階段状に天へ昇ってゆく有様はエジプトかアステカ・マヤの神殿やピラミッドを連想させる。そういえばこの校舎全体が、どこことなく古代遺跡にも似ているのではないか。

ということは、遠い未来と遠い過去とを同時に感じさせる。正面に戻ってみると、切妻屋根の庇の下も段状になっていることに気づく。さかさまの人体が天へと昇るのか、あるいは天から降りるのか。階段には空間だけでなく時間の暗示もある。未来が過去に直接つながっているような感覚が芽ばえる。

ここまで書いてきて、この校舎の不思議さをうまく説明できたかどうか^{おぼつか}覚束ないけれども、以下の事実はすでに明らかだろう。日本の公共建築にふつう求められる機能性、利便性、経済性をほとんど度外視してしまった、ということである。

毛綱毅曠がユニークなのはまさにその点だ。機能性や合理性どころか明るさや解りやすさも否定して、建築を宇宙と自然の「入れ子」にしようとした。釧路という都市のなかにいて道東の、北海道の、地球の、宇宙の時間・空間を感じとれること。毛綱毅曠が母校にプレゼントしたのはそういう「教育的」配慮もある校舎だった。

建築批評家の植田実氏によれば「幻の釧路ともいうべき桃源郷のヴィジョン」だ。実際にこんな校舎で中学校時代を送れたらどんなだろう。羨ましく思えもするが、いまの生徒の多くは意外に無頓着なのかもしれない。それでもなお、建築というものは無意識に働

きかける。たとえ卑近な功利に目を奪われる日常を強いられていたとしても、解放の幻がいつか芽ばえるのではないか、と思われたりした。

市立博物館の時空をめぐる

幣舞中学校から南へすこし行くと、日本にはめずらしい石柱のゲイトがあり、目の前にこれも雄大で不思議な建物が見えてくる。石段を降りて広場を歩き、近づくにつれて建物の見え方が変化するが、左右対称の正面まで来るとようやく博物館らしいとわかる。

この博物館は石積みのドームにも見える中央部から、赤土色の巨大な階段状の両翼部をひろげている。釧路湿原に生きのこる丹頂鶴の姿を象ったといわれるが、むしろ宇宙的というか性的というか、具体物の模倣を超えた象徴性を感じる。なかに入ると、はたして宇宙あるいは人体の内部のような世界だった。

幣舞中学校の外側にも多かった特有の象徴表現を、いっそう明確に見てとれる。球体や楕円、渦や螺旋、結晶や洞穴、入れ子や階段構造などがあちこちにあるが、それらはもともと自然界にそなわっている形体なので、博物館建築にこそふさわしいともいえる。

毛綱毅曠は「記憶の建築」を主張し、「天の記憶」「地の記憶」「人の記憶」をもたない建築は牢獄にすぎないといっていた人だが、博物館自体がまさに、その3種の記憶を入れ子のように集積する空間になっている。実際、1階は釧路地方の大地や海、地質学・海洋学や生物学という「地の記憶」をくりひろげ、2階は先史時代から近・現代にいたる歴史という「人の記憶」をあとづけている。

のこる「天の記憶」は神話や宗教にわたり、4階にあるアイヌの伝説に捧げられたコーナー「サコロベの人々」や、一時は絶滅とされていたのに釧路湿原で生存を確認された丹頂鶴にかかわるコーナー「タンチョウ」などがそれにあたるだろう。

7000万年前のアンモナイトの化石から4万年前のマンモスの骨格レプリカまで、釧路湿原にいまも生きるキタサンショウウオやイトウまで、縄文時代の土器や石偶からアイヌの船や幣棚まで、また米軍による釧



路空襲や1993年の釧路沖地震の資料まで、興味ぶかい展示品は数知れない。しかも空間を縦横にデザインして「記憶の建築」に対応させているので、この博物館をめぐる時間は濃密だった。

とくに感動をおぼえたのは、DNAの構造を模したという二重螺旋階段である。生命の遺伝子を「記憶」するDNAは毛綱建築の縮約のようなもので、二重螺旋を経めぐる体験自体がいわば時空の旅になる。ピラネージの版画を思わせる立体迷路のような空間デザインが秀逸である。

もし私が釧路の子どもだったら、毎日でもこの博物館に来るだろう。幣舞中学校に通って帰りに市立博物館へ——そんな生活を想像してしまったものである。

この2つの建物とMOOだけでなく、毛綱毅曠の「記憶の建築」「異形の建築」が十数箇所あるだけでも、釧路という町は個性的だ。バルセロナのガウディほどではないとしても、もしかすると将来、モヅナの名が釧路の代名詞になるかもしれない。そんなことを考えながら、私はさらにいくつかの建築を見てまわった。

子どもたちの集うところ

といっても毛綱建築だけではない。翌日は駅から市場をへて川ぞいの道立芸術館へ向ったのだが、その途

中でつぎつぎとあらわれる建物たちにも心を惹かれた。

なかでも「こども遊学館」(2005年開設)。芝地に赤・青・紫・黄・緑のへんてこオブジェの点在する広場の奥に、外壁がガラス張りの曲面になった大きな建物がある。

なかに入るとまず広い円形の砂場があり、子どもたちがシャベルを使って遊んでいる。お母さんたちはそれを手伝ったりシートでお弁当を食べたり。吹きぬけ空間なので階上からも見おろせる。快い光景だ。

そこから入場すると大空間がひろがり、1・2階は「あそびらんど」「さんさんひろば」、3階は「ふしぎらんど」、4階は「ものしりらんど」となっているが、ネーミングはともあれ、各階に配置されている学習コーナーやさまざまな遊具、へんてこオブジェの数々がおもしろい。人体骨格標本や立体地図からプラネタリウムまで、博物館的要素も整っている。

しかも閉ざされていない。ガラスの壁からいつも外の景色が見えているし、外からも内部をうかがえる。この開放感は毛綱建築と正反対だが、相呼応する部分もあった。そのひとつは1階から4階まで、細長い円筒形の吹きぬけになった部分である。名づけて「のっぽスタジアム」。

スタジアムといっても1階の平面は子どもの遊び場で、色とりどりの遊具が置かれているだけだが、周囲の通路がおもしろい。卵形に近い楕円に沿ってスロープが螺旋状に昇ってゆく。そこを4階までゆっくり歩きながら、眼下に見おろす子どもたちと家族の光景は暖かく美しかった。

釧路は不思議な町である。自然環境や気候風土も特異だが、そこから生まれ育った都市建築のセンスにも日本の規格を超えたところがあるようだ——そんなふうに感じた2日間だった。



釧路市こども遊学館の内部にある遊び場。4階まで吹きぬけの細長い空間で、卵形に近い周囲は螺旋状のスロープを昇り降りできる。上から見おろす色とりどりの光景は美しく楽しい。撮影：筆者